

杉本苑子

竹ノ御所鞠子

まり



竹ノ御所鞠子

杉本苑子

中央公論社

竹ノ御所鞠子

©一九三二 検印廃止

一九九二年 六月二〇日初版発行
一九九四年 十二月一〇日七版発行

著 者 杉 本 苑 子

発行者 嶋 中 行 雄

印刷所 三晃印刷

製本所 大口製本

発行所 中央公論社

〒104 東京都中央区京橋二丁目一七
番 〇〇一二〇 四一三四
振替

ISBN4-12-002122-X

Printed in Japan

竹ノ御所鞠子*目次					
父のない子ら	5				
唐船	53				
かげろうの女	96				
血染めの雪	142				
散りいそぐ花	188				
主要登場人物関係系図	237				

竹ノ御所鞠子

父のない子ら

1

娘の鞠子まりこを送り出したあと、刈藻かりもはしばらくのあいだ西面にしおもての妻戸ななすのきわに佇んで、暮れなすむ空を見あげていた。

朝からの烈風はいくらか凪ないだが、雲の動きはまだ迅はやく、茜あかねの拡がりも荒々しい。屋敷を囲む竹の林はざわざわと落ちつきなく葉末をそよがせ、その音を縫うように幽かすかな虫のすだきが聞こえる。さかりのころに較べると、しかし秋闋たけた今、虫たちの声は宵々ごとにかぼそくなり増さって、刈藻の胸を締めつけた。

夫に先立たれて以来、彼女の気持は一日として晴れるときがなかった。

（でも、足かけではあれから八年。——鞠子も事なく生おい立たつてくれているし……）
いくらかは、近ごろ心にゆとりが生しょうじて、夕ぐれどきになると決まって襲うわれた病的な鬱うつ

情にも、耐える力が出てきた気がする。

見るまに色褪せて、黝んだ夜天に変わりながら、そのくせ古綿を打ち重ねたような雲の裂け目から一カ所だけ、いつまでも深紅の燃えを覗かせている空のぶきみさ……。少し前までは、そんな夕焼けのひと刷毛にすら血の色を連想して、いくじなく室内へ逃げこんでしまったのに、もう現在の刈藻はたじろがなかった。勾欄に倚ったまま、

（そろそろ、兄弟の待つ宴の席へつくころか。それともまだ、八幡宮の鳥居あたりか）

娘を乗せた輿を追って、思いは共に道を辿っていた。

——どこかでこの時、人の叫び声がした。女の泣き聲も混じって聞こえる。

我に返って、刈藻は息を詰め、耳を澄ませた。異常事態への反応のすばやさは、悲しい習性となって身についてしまっている。

だが人声は、それだけで跡絶えた。不安になり、召使を呼ぼうとしかけて渡廊へ目をやると、紙燭の小さな火が揺れながらこちらへ近づいてくるところだった。

「まあまあ、お方さま、まだ落ち縁になど出ておられたのでございますか」

大仰な声を先立てて、その灯の輪の中へ浮かび上ったのは、小宰相の名で呼ばれている中年の女房の、肉づきのよい丸顔である。

「お風邪を召すといけません。さあ、お部屋へおはいりあそばせ」

言われるまま居間の茵へもどりながら、

「つい今しがた、門の方角でさわがしい声でしたようだけど、なにごとですか？」

刈藻はたずねた。

「旅の小尼でござりますよ。行き倒れかけて、ふらふらご邸内に迷い込んで来たのを下人どもが咎めましてね、追い立てにかかったのですが、泣き悶えて動こうといたしません。腹をすかせていたのでございます」

言うまにも手ばしこく、小宰相は紙燭の火を短檠に移す。

「かわいそうに……」

刈藻は眉をひそめた。

「それじゃなくてさえ奉施をして当然な、みほとけのお弟子……。追い払うなど罪づくりではありませんか」

「はい。居合せた老女がたが下人どもを押しとどめ、粥を振舞ってやりましたところ、ほほほは、お方さま、餓えた狼の血相でガツガツ掻きこみ、なんと、大ぶりな欠け碗を五度も突き出して、ずうずうしくお代りいたしましたよ」

「それはよかった」

小宰相の言い回しのおもしろさに、刈藻もつい、笑ってしまった。

「よほど空腹だったのね」

「まる三日、飲まず食わずで、さまよい歩いていたとやら……」

「どこへ行くつもりで旅をしていたのでしょうか」

「ご当地鎌倉の長禅寺を目ざして、はるばる下野の池辺とやらからまいったそうですが、なにぶんにも疲れ切っている様子なので詳しいことはたずねずに、ひとまず雑仕溜まりの隅でひと眠りさせております」

「年のころは？」

「十三か、四でしょうか。垢まみれの上に日灼けして、とんと金仏の面相ですけど、言葉つきのはきはきした伶俐そうな子柄でございますよ」

「二、三日ゆっくり休息させて、元気になったら出しておやり。米だの下着だの、当座入用なものも持たせてやるとよいよ」

「そういたしましたよう」

給仕の女童が夕餉を運んで来たのをし、おに、小宰相は入れ代って立って行き、尼にかかわる話題はしぜん、刈藻の関心から遠ざかった。

箸を取って食事をはじめると、やはり思いのすべてが鞠子の面ざしだけで占められてくる。娘と一緒になければ食膳に向かったことはなかった。親ひとり子ひとり……。日常なにをする

にも鞠子がかたわらにいて、母の歎きを案じ、幼おきなごころにも精いっぱいその孤こりよう寥を慰めてくれたからこそ、辛い歳つら月をかううじて生きぬいて来られたのである。

（宴席にも、いまごろは馳走が並べられたにちがいない。兄君や弟たちと、鞠子はどのような会話を交していることか……）

あれこれ思いやると、箸の動きがうっかり宙に止まって、菜さいの味つけさえわからなくなる。娘のいない夕餉はあじけなく、わびしい。早々に刈藻は切りあげて仏間へ入った。

女童が心得て、塗りの半挿はんさうや水瓶すいびょうなど手水道具を簀すノ子に並べ、口を漱すすぎ手を清める刈藻の、介添えをつとめる。朝夕の看経かんきんは、病床にでも臥さぬかぎり欠かしたためしがなかった。中央に、おん丈尺たけにたらぬ聖しやう観音像を安置し、お像の左右に右幕下うばくか頼朝をはじめ有縁うゑんのひとと幾人もの位牌を配したこの仏間に坐すると、屋敷のどこにいますときよりも刈藻は安まり、気が落ちつく。

低く普門品ふしんぽんの第二十五を誦し終ったあと、

「お聞きください、背の君」

前將軍頼家よりいえの位牌に向かつて、彼女は語りかけた。

「あなたさまがお亡くなりあそばしたあくる年、おん祖母尼御台所あまみだいどころのおん計はからいにて、鶴ヶ岡八幡宮の別当坊に入室なされたご次男の善哉ぜんやさまが、今日、剃髪得度をとげ、稚児ちご姿から僧

形に變つて、『公曉』の法名を授けられることとなりました」

そうか、ついに善哉は僧籍に追いやられたか……。生前そのまな鋭い、癩癧かんぺきの強そうな頼家の声を、刈藻は現に聞いた気がして、

「お髪に剃刀を当てまいらせたは、別当職の定曉阿闍梨——。四、五日うちに受戒のため京へのぼり、園城寺明王院の公胤僧正のみ弟子となつて、勉強修行に打ちこまれるとかうけたまわりました」

と、彼女もまた、生ある人に告げる語調で言葉をつづけた。

「今宵はその別宴が催され、それぞれに腹こそ違え、父を同じくする兄弟四人が八幡宮の別当坊に参り集うておりまする」

善哉に千寿、鞠子と花若だな？

「はい。父なる大樹を失いながらも、揃つてすこやかな童に育ち、善哉さま——いえ、公曉どのは今年十二歳、千寿丸君が十一歳、鞠子は十歳、末の花若さまも九ツにおなりあそばしました」

聞くにつけても胆が焦れる。鞠子はともあれ、他の三人は源家の嫡統……。三代將軍実朝に、いまだに子が生まれぬなら、なぜ善哉をその跡継ぎと定めぬのか？ 公曉だと？ ばかなッ、法号など耳にしたくもないわ……。

「もっともなお腹立ちとぞんじます。いずれ今回の措置も、尼御台の方寸から出たことでございましょうが、わたくしにすら納得いきかねるご処遇に思われてなりません」

現実には、夫の聲が耳に届くわけではない。刈藻自身の心象から発する疑問の反映が、冥府からの怒りとなって聞きなされるのであらうけれど、当の公暁は、ましてどれほど口惜しがっているか。その内奥を思いやると、刈藻はせっかくの平安が乱されそうになる。

（いけない。こんなことでは……）

気を鎮めるつもりで打ち鉦を鳴らし、亡夫の修羅までを煽った罪を、

（許させ給え）

併せて観世音に懺悔しかけたところへ、

「姫ごみさま、ご帰館にござります」

小宰相があわただしく知らせて来た。

「おお、もどりましたか。思いのほか、早かったこと！」

立って中門廊の駒寄せ近くまで出てみると、茂り合う竹と竹のすきまから松明の輝きがチラチラ洩れ、二人昇きの小ぎれいな女輿が、上土門の内側へ廻り込んで来かけたところであった。

「お方さま、ただいま帰りました」

走り寄って地に片膝突いたのは、護衛のために附けてやった諏訪六郎雅兼すわ ろくろく まさかねという若侍である。「ごくろうでした。輿おしは母屋はならいでの放出に昇のぼき据えさせるがよい」

指図しかけて刈藻はふと、ためらった。見馴れぬ巨漢が、輿おし昇きを入れてすら四、五名にすぎない短い行列のうしろについて、のっそり門内へ踏み込んで来たからであった。

2

男は僧侶だった。墨染すみめの法衣の下に紺糸威おどしの腹巻をつけ、頭と顔を袈裟けさで裏頭包かとうみにして、大目玉だけを覗かせている。杖がわりに薙刀なぎなたを握んだところなど、どこから眺めても荒法師の典型である。

それでも刈藻をみると、あわてたように頭の袈裟を引きむしり、法衣のふところへぎゅうぎゅう押し込んで、

「ご母公におわすか。お初にお目にかかります。拙僧は八幡宮の社僧にんじやく忍寂と申す者。愛らしい姫さまの警護にはいささか人数が手薄ゆえ、万一をおもんばかり、お供してまいりました」

野太い声で名と、同道の理由を述べた。

「それはそれは、ご親切かたじけのうぞんじます。お疲れ休めに一献、召しあがっていかれます」

せぬか」

女世帯だし、ほんの愛想のつもりで言ったのに、忍寂は真に受けたらしく、「しからば仰せに甘えさせていただきます」

輿からおりた鞠子の背について、母屋の客殿へ無遠慮に上がりこんできた。

小宰相ら多くもない女房たちが、不意の来客にとまどいながらも灯台や酒肴を運び入れて、もてなしにかかる。

「おかまいめさるな」

と言いながらも酒好きなのか、さつそく大盃で二つ三つ、忍寂は立てつづけに呷り、さすがに太息をついて、

「おとなしやかな姫さまじゃ。ご縹緲好しは、ご母公ゆずりでござりますな」
柄にもない世辞を口にした。

明りの下でよく見れば、いかついなりにととのった、思慮深い目鼻だちをしている。強訴の先頭に立つ法師武者というより、むしろ学侶に近い四十がらみの僧なのである。

「鞠子姫は口かず少く、万事に控え目な、ゆかしいお子じゃが、いやはや公暁どのの気性の激しさ……。髪を剃りこぼちた当夜のせいでもござろう。えらく気を昂らせてなあ。弟御妹御を相手に『よいか千寿、花若、女ながら鞠子も聞け。おれたちは敵中にいるも同然な身の上なの

だぞ』と、くり返しくり返し、念押しなされますのじゃ」

そう忍寂は打ちあける。

「今夜のご別宴に、あなたさまは陪席あそばしたのですか？」

との、刈藻の問いかけにも、

「さよう。前將軍の四人の忘れ形見のほか、公暁どのの乳夫めのとみ三浦義村うらよしむら、千寿丸どのの同じく乳夫ちかひら泉親衡いみひららが顔をそろえておられましたよ」

忍寂はうなずく。彼は別当定暁に命ぜられ、一座の取りもち役として宴につらなっていたのだそうで、

「千寿どのの花若ぎみ、鞠子姫さまのお手を一人一人かたく握りしめ、『われらはそれぞれ母こそ違うが、頼家卿を父としてこの世に生まれ出た兄弟だ。仲よくしよう。そして亡き父上のご無念を忘れずにいような。たとえ別れ別れに育つても……』とも、公暁どのには仰せられました。なあ姫さま」

鞠子にはほえみかけける。羞はにかみを浮かべて、こっくり頷うなずく仕草が年齢より幼く、いかにも愛らしげだ。

春霞がすみを透すかして遠山の桜を眺めるような、柔らかな印象を纏まとった少女で、伸ばしかけた髪を背の中ほどで切り揃え、両手を膝に、行儀よく坐った小づくりな全姿は、撫子なでしこの小桂こうちぎに埋ま